SHOW-HEYシネマルーム

★★★★

ブラザー　富都（プドゥ）のふたり

2023 年／マレーシア・台湾合作映画
配給：リアリーライクフィルムズ／115 分

2025（令和 7）年 2 月 11 日鑑賞	テアトル梅田

Data　２０２５－１３

監督・脚本：王礼霖（ジン・オング）
出演：ウー・カンレン／ジャック・タン／タン・キムワン／セレーン・リム／エイプリル・チャン／ブロント・バララエ

みどころ

近時、首都移転の話題で注目を集めているのがマレーシアの首都クアラルンプールだが、そこには富都（プドゥ）という、名前とは正反対のスラム街があるらしい。多民族国家で多言語国家たるマレーシアには 5 種類の身分証（ID カード）があるそうだが、それを持てない人が約 30 万人もいるらしい。兄アバンも弟アディもそれだが、それは一体なぜ？

ID がなければ投票権はもとより、バイクの免許も生業につくのも無理。それでも何とか生きていかなければ・・・。そんな兄弟（ブラザー）の生きザマを見るのは息苦しいが、安っぽい純愛モノばかりにうつつを抜かしている今ドキの日本人には、本作のアピール度は高い。“マレーシア映画史上最高の成功作”の問題提起をしっかり味わいたい。

――＊――＊――＊――＊――＊――＊――＊――＊――＊――＊――

■□■マレーシア映画史上最高の成功作が日本へ！こりゃ必見■□■

2025 年 2 月の今、「ガザ地区をアメリカの所有に！」というトランプ大統領の突然の発言に、全世界が大きく揺れている。中東問題の焦点の一つであるガザ地区を巡る歴史は複雑かつ難解だが、東南アジアの国・マレーシア連邦とその首都クアラルンプールを巡る歴史も複雑かつ難解だ。

マレーシアは 19 世紀にはイギリスの支配下にあったが、TV ドラマ『怪傑ハリマオ』（60～61 年）でよく知られているとおり、第二次世界大戦によって日本軍がマレーシア一帯を支配した。しかし、日本の敗戦によって再びイギリスの統治下に。そして 1957 年にマラヤ連邦がイギリスから独立してクアラルンプールがその首都となり、1963 年にマレーシア連邦が結成された後も、首都の座を維持している。なお、連邦行政機関が集中するクアラルンプールは近時、慢性的な交通渋滞に見舞われており、市内は特に悪化の傾向にあるため、

政府は行政機能の非効率性を解決するために、マルチメディア・スーパーコリドー計画の一環としてクアラルンプール郊外のプトラジャヤにITを基盤とした行政都市を建設し、連邦政府機能を移転する計画（首都移転計画）が遂行中で全世界の注目を集めている。

私はマレーシア連邦やクアラルンプールについてその程度の基本的知識を持っていたが、日本でマレーシア映画が劇場公開されるのは珍しい。本作は世界の映画祭を席巻し、100万人の魂を揺さぶった感動作、そしてマレーシア映画史上最高の作品らしい。そんな本作が、遂に日本上陸ともなれば、こりゃ必見！

■□■邦題の意味は？原題は？富都（プドゥ）とは？■□■

本作の邦題は『ブラザー　富都（プドゥ）のふたり』だが、原題は『富都青年／Abang Adik』だ。英題も『Abang Adik』だ。プロデューサー業から転じて本作を初監督作品として大成功させたジン・オング監督は、パンフレットにある独占インタビューの中で、「アバン・アディ」はマレーシアの母国語から来ているもので、「ABANG＝アバン」は兄を、「ADIK＝アディ」は弟を意味するため、合わせて兄弟という意味になると説明している。

したがって、メインの邦題「ブラザー」は、兄弟の名前ではなく、兄弟という意味の方に重点を置いたものだが、サブタイトルとされた「富都（プドゥ）のふたり」の富都（プドゥ）とは何？これはもちろん地名だが、この富都（プドゥ）には荒廃したスラム街があり、この地域には不法滞在者2世ともいえる人々やさまざまな国籍・背景を持つ貧困層の人々が暮らしているらしい。なるほど、なるほど。すると、本作は邦題のとおり、富都のスラム街に住むアバン（兄）とアディ（弟）の物語！

2008年の第81回アカデミー賞は『スラムドッグ$ミリオネア』（08年）（『シネマ22』29頁）が監督賞、作品賞等最多8部門を受賞し、13部門にノミネートされていた『ベンジャミン・バトン　数奇な人生』（08年）（『シネマ22』16頁）に圧勝したが、同作に見るインドのスラム街を舞台とし、貧困と犯罪の中に浮かび上がる純愛の姿と、最後の質問を迎えるクライマックスは実にスリリングだった。近時ハリウッドを圧倒する勢いのあるボリウッド作品たる同作では、インドのムンバイのスラム街そのものが大きな見どころだったが、それは本作も同じだ。もっとも、『スラムドッグ$ミリオネア』では、そのスラム街の大きさと、その中で生きる子供たちのエネルギーに圧倒されたが、本作に見る「富都」という名前とは正反対のスラム街ぶりは、本作全編を通じてじっくり確認したい。

■□■民族は？言語は？ＩＤ（身分証）は？■□■

マレーシアやクアラルンプール、そして富都地区について知識の乏しい日本人が、本作を鑑賞し、理解するについては、パンフレットにある、①児玉美月氏の「隠喩的に描かれたアバンとアディの形容できない感情」、②山本博之氏の「アバンとアディの境遇は決して特異な例ではない－『Brother ブラザー　富都（プドゥ）のふたり』が描いたマレーシアの現実。」、③長夏実氏の「アバンと法師の対話シーンには細心の注意を払った」をしっかり学習する必要がある。

それらによると、まずマレーシアは多民族国家で、マレー系 60～70%、華人系 23%、インド系 7%、その他 10%で構成されているそうだ。そのため、マレーシアで使用されている言語は、マレー語、英語、中国語、タミル語などさまざま。そして、各言語での TV 放送や新聞があるそうだ。したがって、本作でも随所に、中国語、英語、マレー語が飛び交ううえ、耳が不自由で言葉もハッキリ発音できない兄アバンと弟アディとの会話は手話になるので、それにも注目！

他方、同一民族国家である日本では全く想像できないことだが、マレーシアには 5 種類の身分証（ID カード）があるらしい。まず、12 歳以上の国民には青色の身分証が発行され、常に携行することが義務付けられている。そして、12 歳未満の国民はピンク色の身分証が与えられ、12 歳になると青い身分証に切り替えられる。永住権を持つ外国人は赤色、一時滞在の外国人はオレンジ色の身分証が与えられ、軍人用の灰色の身分証とあわせて、5 種類もの身分証（ID カード）があるそうだ。

■□■なぜＩＤがないの？兄と弟の違いは？口論の行方は？■□■

共にクアラルンプールにある富都のスラム街に住んでいる、ろうあ者である兄のアバンは毎日真面目に働いていたが、弟のアディは健常者であるにもかかわらずろくな仕事につかず、簡単に現金が手に入る闇社会とつながっていた。本作導入部では、そんな姿が、両親のいない 2 人の面倒を母親同然にみている女性（？）マニー（タン・キムワン）や、ID を持たない 2 人に対して、ID 取得のための努力を続けているソーシャルワーカーの若い女性ジアエン（セレーン・リム）らとのさまざまなエピソードを通じて描かれていく。なぜアバンとアディの2人がマレーシアでは不可欠とされているIDを持っていないのかは日本人にはわかりにくいが、それをしっかり学習することが本作を理解するうえでは不可欠だ。

アバンとアディは互いに何としても ID を取らせたいと思っていたが、アバンには両親がなく出生を証明する書類が火事で消失してしまっているため身分証の取得は望めないのに対し、アディは出生証明書があるため、生き別れになった父親が保証人になってくれれば ID 取得の可能性があるらしい。日本人の私には ID を巡るそんな兄弟の違いはよくわからないが、ある日ジアエンが、行き別れになった父親にたどり着いたうえ、その父親がアディの ID 取得に協力すると言ってくれたそうだから、ラッキー。マレーシアには ID を持たない人が約 30 万人もいるそうだが、ID を持っていなければ選挙権はもとより、バイクの免許も取得できないし、生業に就くことも困難だ。

したがって、ジアエンの努力によってその取得の可能性が出てくれば、アディは当然それに協力！そう思ったが、なんとアディは、ジアエンやアバンの説得にもかかわらず、「父親とは会いたくない」の一点張りだから、困ったものだ。そんな中でもジアエンは懸命の努力を続けたが、ある日アバンの留守のうちにジアエンとアディが口論となり、揉み合いがエスカレートすると、あっと驚く大変な事件に！

■□■なぜこんな裁判が？アバンの願いは？法師との対話は？■□■

映画評論家であると同時に弁護士でもある私は、『名作映画から学ぶ裁判員制度』(10 年)や『“法廷もの”名作映画から学ぶ生きた法律と裁判』(19 年）を出版し、「法廷もの」の名作をさまざまな視点から評論してきた。本作は後半からはその「法廷もの」になってくるので、それに注目！事件は殺人事件。被害者はジアエンだが、被疑者は、あの時、ジアエンと口論し揉み合ったアディではなくアバンだから、アレレ、アレレ・・・。

本作が世界の映画祭を席巻したことは前述したが、とりわけ、ろうあ者の兄アバン役を演じた台湾の俳優・ウー・カンレンの演技は高く評価され、台湾のアカデミー賞たる金馬奨で最優秀主演男優賞を受賞し、欧米メディアからは「東洋のロバート・デ・ニーロ」と称賛されたそうだ。弟のアディ役を演じたジャック・タンも多くの助演男優賞を受賞したが、とりわけ本作後半に見せる兄弟の逃避行（？）や、裁判シーンと死刑判決の言い渡し、そして死刑執行に至るまでの、アバンの声にならない“魂の叫び”は本作の大きな見どころだ。もっとも、弁護士の私の目には、なぜジアエンの死亡についてアバンが被疑者として逮捕され、何ともずさんな捜査と何ともずさんな裁判で死刑判決に至るのかが納得できないのは当然だ。

映画の中では、弁護士に救いを求めるアディに対して、弁護士事務所の職員から、「ジアエンの遺体の爪にアバンの皮膚片が見つかった」との情報が伝えられていたが、それってホント？それとも・・・？だって本作では、ジアエンと口論し、“ある結果”を引き起こしたはずのアディは、アバンが自首してきたとの TV ニュースを見て初めてジアエンの死亡を知ったというストーリーになっているのだから、少なくとも観客にはアバンが犯人だとは思えないわけだ。もっとも、本作は「推理モノ」ではないから、「真犯人は誰だ？」というテーマに重点はなく、ジアエンの死亡事件を巡るアバンとアディとの立場の相違や兄弟愛を確認する映画だから、本作後半ではそれをしっかり味わいたい。さらに、ある意味で本作最大のハイライトともいえる、死刑執行に挑むアバンと法師との対話シーンにも注目し、その意義をしっかり考えたい。

■□■2 人に対する 12 の質問と回答をじっくりと！■□■

本作のパンフレットには、①「自分と違う環境にある人たちに対して、無自覚に憐れんでいないだろうか。アバンという役を通して、僕が自戒を込めていちばんみんなに伝えたいこと。」と語るウー・カンレンへの 12 の質問とそれに対する回答、②「私たちは多くの場合、自分の望むものを選ぶことはできない。でももし選べる時が来たら、自分が望むもののために戦ってほしい。」と語るジャック・タンへの 12 の質問とそれに対する回答が掲載されている。

その質問はありふれたものが多いが、唯一本質をつく質問は、「あなたがアバンを通して観客に伝えたかったことは？」で、それに対するウー・カンレンの回答は次のとおりだ。

――あなたがアバンを通して観客に伝えたかったことは?

アバンのような立場の人はマレーシアにはたくさんいると思う。僕らは彼らを憐れんだり悲しい運命だという視点で見ることもあると思う。でも彼らは彼らの立場で誇り高く、日々笑顔で日常を生きてるんだ。ただ可哀想な人たちということで、彼らを受け取ってほしくはない。僕たちは時には自分が置かれている社会的地位や環境、尺度で物事をジャッジしてしまうところがあると思う。そうした価値観の中には、自分が理解できないことで批判的になってしまったり、上から目線で差別的な目線になってしまっていることもあると思うんだけど、そんな感情を持つことに無自覚になってしまっているのではないかな。このことは僕がアバンという役を通して、皆さんに自戒を込めて最も強く伝えたいことなんだ。

また、「あなたがアディを通して観客に伝えたかったことは?」に対するジャック・タンの回答は次のとおりだ。

――あなたがアディを通して観客に伝えたかったことは?

観客それぞれが映画や物語に対して異なる視点を持つかもしれないけど、僕たちが最も伝えたかったのは「愛」。そして、兄弟二人の絆を見てもらいたかった。もちろん、アディの衝動的で無知な行動は間違っていると思う。でも、もしアディのキャラクターを通じて観客に何かを伝えられるとしたら、それは「私たちは多くの場合、自分の望むものを選ぶことができない」ということなんだ。アディのように、自分の身分や家族、育った環境の影響など、彼が選べなかったものがたくさんあった。でも彼が成長し、何かを選択する力を得るときが来たら、彼は自分が望むもののために戦うべきだと思う。アディのキャラクターの評価すべきところは、彼が常に生きるために努力し、自分が手に入れられるものや望むもののために戦い続けている点だと思うんだ。

本作はいかにもマレーシアらしい映画であるため、兄アバンの立場も弟アディの立場も、世界一平和で安心・安全な国に住む私たち日本人には容易に理解できないが、本作の鑑賞後は上記の２人の回答をしっかり胸に刻み込みたい。

2025（令和7）年２月 14 日記